No25
2016.3
東邦看護学会
NEWSLETTER

第15回東邦看護学会学術集会を終えて

学術集会会長　出射 明子
（人間総合科学大学保健医療学部看護学科　特任教授）

平成27年12月19日(土)、第15回東邦看護学会学術集会が看護学部の校舎にて開催された。

これまでの学術集会では「看護実践」をテーマに開催されることが多かったが、今年は、看護職が働き続けるために自分自身のキャリアデザインについて考える機会にしたいと「強みをみつける・みがく ーー歩ふみ出すためにー」をテーマにした。

午前は会長講演と口演・示説合わせて23題の発表が3会場で行われた。会長講演では、看護にやりがいを見出し働き続けるには、職場環境を整備していくと同時に、私たち個人が何らかの行動を起こすことも必要である。前に一歩ふみ出すためには、これまでの自分に埋没せず、自分の強みに気づき、そこから「目の前のカベを乗り越える」ための打開策を探っていく。それには、どのような能力や心がまえ、発想が必要なのか社会人基礎力に照らして考えた。そして、上司の一言が後押しをしてくれるということを自身の体験をもとに話させていただいた。

午後の特別講演では、人的資源開発論やキャリア論などがご専門の花田光世氏（慶応義塾大学名誉教授）を講師にお迎えし「若手看護師の初期キャリア：なぜ総合力が重要なのか」というテーマでお話をいただいた。「行動においては、個々人の持つスキル・知識・資格といった可視化された要素が行動をおこさせるのではなく、そのスキルや知識を発揮するのに必要なマインド、当事者意識、責任感といった『こころ』が重要である」「キャリアの積み方の違い：スペシャリストは組織の中で積めばよいが、プロフェショナルは当事者意識と自己責任においてキャリアを積む」と提言いただいた。

その後のシンポジウムでは、「私のキャリアデザイン ー弱みが勇気に変わった瞬間（とき）ー」と題し、東邦大学看護学部助教の山本容子さん、東京消防庁東村山消防署勤務の救急救命士・助産師の島田倫子さん、東京医科歯科大学医学部附属病院看護部長の川﨑つま子さんの３名の方に、看護職として「一歩ふみ出した」体験をお話しいただいた。それぞれに看護職としてのキャリアは異なるが、現状に甘んじることなく未来に向かう姿勢には共通点があったように思う。

今年の学術集会賞は、佐々木由比さんらの「転倒危険度が低い消化器疾患患者の転倒要因の分析」、藤田かほ里さんらの「A病院 ICU・CCU における口腔アセスメントの実態調査」、渕本雅昭さんの「急性・重症患者看護専門看護師における高度看護実践を行うために必要な臨床実践能力に関する研究」の３題が受賞した。惜しくも受賞を逃した他の演題も、時流を捉えた興味深いものであった。

今回の参加者は382名で、東邦大学関係以外からの参加もあった。今後に向けて、学会の益々の発展に会員相互の協力体制があることを期待したい。

最後になりましたが、ご参加下さった皆様方、企画・運営にご尽力下さった委員の皆様をはじめ、ご協力とご支援をくださったすべての皆様に心から御礼申し上げます。

特別講演の座長を終えて

山城　久典
（東邦大学看護学部）

今年度は、組織社会学の専門家である花田光世先生（慶應義塾大学名誉教授）にご講演いただきました。花田先生は、長年にわたり企業組織、とりわけ人事・教育・キャリア問題研究の第一人者としてご活躍されている方です。

ご講演では、まず看護大学が多く設置され始めた1993年前後から今日までの職能開発およびキャリア教育と政策について話されました。特に、2016年4月から施行される職業能力開発促進法では、「職業生活の設計とその目標作り、達成のための能力開発責任は個人の責任」であるとされ、このような状況のなかでキャリア開発を検討していく必要があることを指摘されました。また、今後の高齢世代人口と現役世代人口の比率の推移などを背景に、ライフキャリアを20代から60代以降の節目で見ていくこと、自律的キャリア開発とそのロードマップのモデルなどを示されました。

今後の看護職のキャリアを考えていくとき、過去の歴史的な流れを押さえ、現在の我々を取り巻く社会的背景を視野に入れて、将来に向かって考えていくことの重要性を投げかけてくださったのだと思います。

末筆ながら、今回は特別講演の座長という貴重な機会をいただき、学術集会会長をはじめ皆様方に感謝申し上げます。

シンポジウムの座長を終えて

谷口　尚美
（東邦大学　看護企画室）

今回のシンポジウムは、タイトルを「私のキャリアデザイン～弱みが勇気に変わった瞬間（とき）～」としました。看護専門職として就業するなかで感じるさまざまな葛藤やジレンマなどから一歩踏み出すための勇気につながれば、という願いをこのタイトルに込めました。3名のシンポジストにご登壇いただき、これまでの看護職としてのキャリアのなかで一歩踏み出した経験などを中心にお話していただきました。

本学看護学部教員の山本容子氏には、マラウイ共和国（アフリカ）の保健医療現場での経験をもとに、遠い異国へ飛び込んだきっかけや失敗談を交えながらキャリアデザインについてお話していただきました。助産師である島田倫子氏は救急救命士として消防署で活躍されており、現在の立場にたどり着いた経緯や苦労話などをユーモラスにご紹介いただきました。川﨑つま子氏には、職場での役割や多くの経験をもとに、演劇の道を考えていたはずが37年以上を看護の世界で精進することに至った看護の魅力や極意をお話しいただきました。

シンポジスト3名のお話は大変魅力的で、会場の多くの人が引き込まれたのではないでしょうか。今回のシンポジウムが、参加された皆様の一歩ふみ出す勇気につながることを願ってやみません。

学術集会賞を受賞して

佐々木　由比（東邦大学医療センター大森病院　２号館６階東病棟）

私達が看護研究のテーマにしたのは「転倒危険度が低い消化器疾患患者の転倒要因分析」です。普段業務の中で、危険を予知し、予防策等も立てている中ですが、それでもなかなか減らすことのできない課題でもあるため、何か共通する原因があるのではないかと考えこのテーマにしました。私は看護研究自体が初めてだったので、どのように研究を進めていけばよいか分からず周囲の方にサポートを受けながら進めていきました。研究には統計が必要だったため、統計学の講義にも参加し、統計も学んでいきました。日々の業務の合間での看護研究だったため、決して時間に余裕があったわけではなく、忙しく時間は過ぎていき、あっという間でした。昨年の12月東邦看護学会に出席させて頂き、他の病院の看護研究の発表を聴かせて頂きました。そして、今年の12月、今度は私達が東邦看護学会で発表させて頂くこととなり、結果学術集会賞を受賞させて頂きました。大変なこともありましたが、看護研究メンバーとともに１年間頑張ってきて良かったなと思っています。

すでに研究結果を元に病棟でも取り組みを行っている所ではありますが、今後更に転倒事故が減らせるようにしていきたいと思っています。

【共同研究者】　小林洋子　新開昭子　小畑由紀　宮地富士子
【研 究 課 題】　転倒危険度が低い消化器疾患患者の転倒要因の分析

藤田　かほ里（東邦大学医療センター佐倉病院　ICU・CCU）

当院の ICU･CCU では、口腔アセスメントは個人に委ねられているため、スタッフがどのような実践をしているかわからない現状がありました。そこで、気管挿管患者を対象とした ICU・CCU 看護師の口腔アセスメントに対する意識、知識、観察状況と、口腔アセスメントの実施状況を調査しました。研究を通して、現在行われている口腔アセスメントの現状が明らかになり、口腔内の観察方法や評価方法に対する知識の習得、統一した観察方法や評価方法の導入が必要であることがわかりました。今回の結果と学術集会の発表後にいただいた貴重なご意見を参考に、研究の成果をどのように実践に取り入れるかを今後検討していきたいと思います。そして、ICU・CCU 全体の口腔アセスメントの質向上を目指し、引き続き研究の課題に取り組んでいきます。

【共同研究者】　山口真司　清田和弘　工藤由花
【研 究 課 題】　A 病院 ICU・CCU における口腔アセスメントの実態調査

渕本　雅昭（東邦大学医療センター大森病院　救命救急センター）

このたびは東邦看護学会学術集会賞の栄誉を賜り、誠に光栄に存じます。このような身に余る賞を頂き、東邦看護学会の選定委員の皆様には感謝の念に堪えません。また、何より本研究にご協力下さいました方々にも深くお礼を申し上げたいと思います。

本研究は、文部科学省科学研究費の助成を受けて、急性・重症患者看護専門看護師における高度看護実践能力とは何かを明らかにする過程の第一報をさせて頂きました。本研究は、現在も引き続き進めており、将来的には専門看護師の高度看護実践力の可視化に向けて取り組んでいるところでございます。

臨床看護の現場から研究を続けて発信していくことは、私自身時間的な余裕や体力、根気、研究の成果など難しいと感じておりました。しかし、今回の受賞を励みに、研究にもさらに邁進できるよう取り組んで行けたらと思っております。この上は、皆様のご期待にお応えできるよう、日々精進してまいる覚悟でございますので、今後とも研究に対する一層のご理解とご指導を賜りますようお願い申し上げます。

【研 究 課 題】　急性・重症患者看護専門看護師における 高度看護実践を行うために必要な臨床実践能力に関する研究

研究に関するよろず相談サロンを終えて

研究活動支援委員長　福田 美和子

第15回東邦看護学会学術集会において、よろず相談サロンを開設しました。相談サロンをはじめて３回目となりました。今年は、なんとなく日々取り組む中で抱いた疑問に対し、研究課題を設定するとしたら、どのようなことを明らかにすることになるのかといった、研究テーマの絞り込みに関するご相談をいくつか受けました。残念ながら、今回のご相談内容について、研究終了まで継続的に個別相談をお引きうけすることはできませんが、研究の入り口について、相談者と共にディスカッションできたと思っております。ぜひ研究に着手され、その成果が東邦看護学会誌で拝読できることを楽しみにしております。

研究は日々の実践の中に潜むテーマを追求していく科学的活動です。東邦看護学会が今以上に発展していくよう、微力ではありますがサポートしていきたいと思っておりますので、今後も利用していただければ幸いです。

第16回東邦看護学会学術集会の紹介

第16回東邦看護学会学術集会大会長　横井 郁子

テーマ　**療養環境再考**　　開催月日　12月17日（土）

興味関心から機会があれば病院視察、とくに入院病室ベッドまわりの環境を見せてもらっています。ベッドまわりの環境は患者像を知る手がかりになるばかりでなく、看護提供者のこだわりをうかがい知ることもできます。しかし、その場にいる看護師は自分たちのこだわりに気づいていないことが多々あります。医療提供が速やかにできるベッドの位置、患者の自立を促す口腔ケアセットの配置など「これぞ看護」という環境整備に光が当たっていないのはなんとも悔しい。

ケア提供の場の細分化が進んでいます。高度医療機器に囲まれた環境、なじみの物に囲まれた環境、一人暮らしの生活、家族との生活、家族ではない人との生活・・・。さまざまな病期等によりケア対象者が置かれる場の物・人の環境は異なります。それらに応じてケア提供の方法も変わります。日々の環境整備は「掃除」ではなく「看護」であることを再認識することが、さまざまなケアの場をつなぐ看護師の基盤を強固なものにするのではないか、そんなことを考え発信する学術集会にしたいと構想を練っています。どうぞよろしくお願いいたします。

NEWS LETTER
ニュースレター事務局
〒143-0015　東京都大田区大森西 4-16-20
TEL 03-3762-9881
FAX 03-3766-3914